

2024年度 09)加速器質量分析装置等利用(共同利用) 目次詳細

13 件

* 所属・職名は2025年3月現在
* Affiliation and Department displayed are current as of March 2025.

研究代表者 Principal Investigator	所属機関* Affiliation	所属部局* Department	職名* Job title	研究課題名 Project Title	頁 Page	備考 Remarks
窪田 薫	海洋研究開発機構	海域地震火山部門	研究員	温暖化アナログとしての縄文海進最盛期の北海道沿岸部の水温・栄養 塩循環・海流の定量的復元	315	
岸田 拓士	日本大学	生物資源科学部	教授	近代以前の生物の遺伝的多様性の解明のための解析試料の年代測定	316	
勝田 長貴	岐阜大学	教育学部	教授	湖沼堆積物を用いた最終氷期以降のモンゴル高原の古環境復元	317	
荻谷 愛彦	専修大学	文学部 環境地理学科	教授	赤石山脈における大規模斜面崩壊の発達過程解明に向けた高精度年代測定	318	
高橋 浩	産業技術総合研究所	活断層・火山研究部門	主任研究員	水試料の放射性炭素濃度測定における生物活動の影響除去に関する新手法開発	319	
池盛 文数	名古屋市環境科学調査センター	環境科学室	研究員	放射性炭素を用いた大気エアロゾルの発生源解析	320	
谷水 雅治	関西学院大学	生命環境学部	教授	海藻資料を用いた北海道周辺海域 ¹⁴ C量の分布と変遷の把握	321	
北川 淳子	福井県自然館博物館		学芸員	福井県三方五湖周辺遺跡の編年	322	
植村 立	名古屋大学	環境学研究科	准教授	鍾乳石の放射性炭素年代測定前処理の検討	323	
奥野 充	大阪公立大学	大学院理学研究科地球学専攻	教授	湿地堆積物の堆積過程の高精度復元	324	
奥野 充	大阪公立大学	大学院理学研究科地球学専攻	教授	火山噴火史を高精度化する年代学的研究	325	
佐々木 聡史	群馬大学 共同教育学部	理科教育講座	講師	南極域における第四紀の海成化石と堆積物を用いた古環境復元	326	
中西 利典	ふじのくに地球環境史ミュージアム	学芸課	教授	沖積層に含まれる碎屑物を用いた堆積年代の高精度解析	327	

(別紙様式09-1) 2025年度名古屋大学宇宙地球環境研究所「加速器質量分析装置等利用(共同利用)」報告書			
報告年月日	2025年3月31日		
代表者氏名	くぼた かおる 窪田薫		
所属機関	海洋研究開発機構		
部局	海域地震火山部門		
職名	研究員		
E-mailアドレス	kubotak@jamstec.go.jp		
下記の共同研究について、別紙のとおり報告します。			
記			
1. 研究課題名			
和文	温暖化アナログとしての縄文海進最盛期の北海道沿岸部の水温・栄養 塩循環・海流の定量的復元		
英文	Quantitative reconstruction of water temperature, nutrient cycles, and ocean currents during the Holocene Climatic Optimum as an analogue of the future		
2. 研究体制(宇宙地球環境研究所の受入責任教員を含めてください)			
氏名	所属機関、部局	職名	具体的な役割
窪田薫	海洋研究開発機構 海域地震火山部門	研究員	有孔虫や貝殻試料の地球化学分析全般
南雅代	名古屋大学 宇宙地球環境研究所	教授	放射性炭素分析全般
白井厚太郎	東京大学 大気海洋研究所	准教授	貝殻の切断や成長線解析
大串健一	神戸大学大学院 人間発達環境学研究科	教授	厚岸湾／湖の堆積物採取
3. 研究成果の概要(400字程度でまとめてください)			
地球温暖化に伴う北海道沿岸部の将来の生態系変化の正確な予測に繋げるため、比較的最近の地質学			
4. 成果論文リスト(著者名、タイトル、雑誌名、巻号、ページまたはDoi、年、順番は入れ替え可)			
5. 学会発表リスト(著者名、タイトル、学会名、開催場所、年月日)			
6. その他の成果リスト(著書、特許等)			

(別紙様式09-1) 2024年度名古屋大学宇宙地球環境研究所「加速器質量分析装置等利用(共同利用)」報告書			
報告年月日	2025年2月21日		
代表者氏名	岸田拓士		
所属機関	日本大学		
部局	生物資源科学部		
職名	教授		
E-mailアドレス	taku.kishida@gmail.com		
下記の共同研究について、別紙のとおり報告します。			
記			
1. 研究課題名			
和文	近代以前の生物の遺伝的多様性の解明のための解析試料の年代測定		
英文	Radiocarbon dating of specimens for revealing premodern genetic biodiversity		
2. 研究体制(宇宙地球環境研究所の受入責任教員を含めてください)			
氏名	所属機関、部局	職名	役割
岸田 拓士	日本大学生物資源科学部	教授	研究総括・DNA抽出・遺伝データ解析
中西 利典	ふじのくに地球環境史ミュージアム	教授	年代測定試料処理
北川 浩之	名古屋大学宇宙地球環境研究所	教授	年代測定
3. 研究成果の概要(400字程度でまとめてください)			
道東釧路に位置する二つの縄文遺跡(東釧路貝塚[縄文早期～中期]、幣舞遺跡[縄文晩期～続縄文])を中心に、先史時代捕鯨の跡が残る3地域6サイトの先史時代遺跡から出土したイルカ類の骨からコラーゲンおよびDNAを抽出して、放射性炭素年代測定とミトコンドリア塩基配列解読を行った。その結果、東釧路貝塚から出土したイルカ類、特にカマイルカの遺伝構成は、同じ場所に存在するが時代の異なる幣舞遺跡出土のイルカ類とは大きく異なることが示された。また、東釧路貝塚で最も若いサンプル(およそ4000年前)と幣舞遺跡で最も古いサンプル(およそ3000年前)の間の1000年間に、当該年代を示すイルカの骨が発見されない、釧路地方における捕鯨の空白期が見つかった。この空白期のはじまりは全地球規模の寒冷化、いわゆる4200年前イベントと同期しており、当時の気候変動によって陸上だけでなく海洋環境も大きな影響を受けたことが示唆された。			
4. 成果論文リスト(著者名、タイトル、雑誌名、巻号、ページまたはDoi、年、順番は入れ替え可)			
Kishida T, Sawada K, Namigata S, Takabatake T, Suzuki M, Takezoe N, Yamamoto T, Nakanishi T, Kitagawa H. (2025) Hidden population turnover of small odontocetes in the northwestern North Pacific during the Holocene. <i>Biology Letters</i> 21, 20240525. (doi: 10.1098/rsbl.2024.0525)			
5. 学会発表リスト(著者名、タイトル、学会名、開催場所、年月日)			
岸田拓士, 日本沿岸におけるイルカ類の集団構造の変遷, 日本進化学会26回神奈川大会, 東海大学(神奈川県平塚市), 2024年8月21日. 岸田拓士・澤田恭平・波形早季子・高島孝宗・鈴木美和・竹添七海・山本拓実・中西利典・北川浩之, 日本沿岸における先史時代のイルカ類の遺伝的多様性, 第72回日本生態学会大会, 札幌コンベンションセンター(北海道札幌市), 2025年3月15日. 毛防子璃奈・瀬川高弘・波形早季子・澤田恭平・李何萍・三谷曜子・北川浩之・豊田敦・岸田拓士, ニホンシカは北海道のトドの中で生きている? 縄文時代のニホンシカのゲノム解析から探るトド・アシカ類の集団史, 第72回日本生態学会大会, 札幌コンベンションセンター(北海道札幌市), 2025年3月18日.			
6. その他の成果リスト(著書、特許等)			
岸田拓士 (2024) 古代DNAで探る縄文時代の鯨類の遺伝的多様性. In: 種生物学会 編, タイムカプセルの開き方. 文一総合出版. pp.79-94. ISBN: 978-4-8299-6212-1.			

(別紙様式09-1) 2024年度名古屋大学宇宙地球環境研究所「加速器質量分析装置等利用(共同利用)」報告書			
報告年月日	2025年2月21日		
代表者氏名	かつた ながよし 勝田長貴		
所属機関	岐阜大学		
部局	教育学部		
職名	教授		
E-mailアドレス	katsuta.nagayoshi.e9@f.gifu-u.ac.jp		
下記の共同研究について、別紙のとおり報告します。			
記			
1. 研究課題名			
和文	湖沼堆積物を用いた最終氷期以降のモンゴル高原の古環境復元		
英文	Paleoenvironmental reconstruction of Mongolian Plateau since the last glacial period		
2. 研究体制(宇宙地球環境研究所の受入責任教員を含めてください)			
氏名	所属機関、部局	職名	役割
勝田長貴	岐阜大学、教育学部	教授	解析
益木悠馬	岐阜大学、連合農学研究科	D2	前処理、解析
板山由依	岐阜大学、自然科学技術研究科	M2	前処理、解析
高野真子	岐阜大学、教育学部	B4	前処理、解析
河村侑哉	岐阜大学、教育学部	B4	前処理、解析
南 雅代	名古屋大学、宇宙地球環境研究所	教授	グラフィット作製、測定
3. 研究成果の概要(400字程度でまとめてください)			
放射性炭素年代測定に関しては、昨年度作成したモンゴル湖沼堆積物のグラフィット試料は、分析装置の故障のため、本年度は測定結果をえることができなかった。また、追加として、数試料の分析前処理を実施した。			
4. 成果論文リスト(著者名、タイトル、雑誌名、巻号、ページまたはDoi、年、順番は入れ替え可)			
Masuki, Y., Katsuta, N., Naito, S., Murakami, T., Umemura, A., Fujita, N., Matsubara, A., Minami, M., Niwa, M., Yoshida, H., Kojima, S., 2025. Redox control in arsenic accumulation with organic matter derived from a varved lacustrine deposit in the Jurassic accretionary complexes. Journal of Hazardous Materials 485, 136843.			
5. 学会発表リスト(著者名、タイトル、学会名、開催場所、年月日)			
益木悠馬・板山由依・南 雅代・丹羽正和・由水千景・陀安一郎・勝田長貴: 安定同位体比と有機元素組成に基づく姉川湖成層のヒ素の起源と堆積過程. JpGU 2024, 幕張メッセ, 2024年5月29日			
板山由依・益木悠馬・南 雅代・落合伸也・由水千景・陀安一郎・丹羽正和・勝田長貴: モンゴル高原東部ブイル湖の湖底堆積物を用いた過去89年間の環境変動解析. JpGU 2024, 幕張メッセ, 2024年5月29日			
益木悠馬・長瀬美羽・Davaasuren Davaadorji・板山由依・千由水景・陀安一郎・勝田長貴: オルゴイ湖堆積物の安定同位体組成に基づく最終退氷期以降の古環境変動解析. 地球研シンポジウム, 総合地球環境学研究所, 2024年12月20日.			
板山由依・Davaadorj Davaasuren・落合伸也・南 雅代・益木悠馬・由水千景・内田真緒・丹羽正和・陀安一郎・長尾誠也・Niiden Ichinnorov・勝田長貴: モンゴル東部ブイル湖・湖底堆積物の安定同位体比分析による近過去の環境変動推定. 地球研シンポジウム, 総合地球環境学研究所, 2024年12月20日.			
6. その他の成果リスト(著書、特許等)			

(別紙様式09-1) 2024年度名古屋大学宇宙地球環境研究所「加速器質量分析装置等利用(共同利用)」報告書			
報告年月日	2025年3月15日		
代表者氏名	かりや よしひこ 荻谷 愛彦		
所属機関	専修大学		
部局	文学部		
職名	教 授		
E-mailアドレス	kariya@isc.senshu-u.ac.jp		
下記の共同研究について、別紙のとおり報告します。			
記			
1. 研究課題名			
和文	赤石山脈における大規模斜面崩壊の発達過程解明に向けた高精度年代測定		
英文	High precision ^{14}C dating for reconstructing large-scale rockslides in the Akaishi Range		
2. 研究体制(宇宙地球環境研究所の受入責任教員を含めてください)			
氏名	所属機関、部局	職名	役割
荻谷 愛彦	専修大学・文学部	教授	研究計画・試料採取・研究総括
山田 隆二	防災科学技術研究所	上席研究員	試料採取・データ評価・研究総括
中西 利典	ふじのくに地球環境史ミュージアム	教授	試料採取・年代測定・データ評価
北川 浩之	名古屋大学・宇宙地球環境研究所	教授	年代測定・データ評価
3. 研究成果の概要(400字程度でまとめてください)			
2024年3月、安倍川源流地域の支流タチ沢に形成された堰き止め湖沼堆積物の地質調査と試料採取を実施し、露頭やボーリングコアから試料29点を得た。堰き止めは大谷崩由来の岩屑供給による安倍川本流の河床上昇を原因とする。同年11月には遠山川で同様の調査を行い、試料6点を得た。2025年2月には天守山地で崩壊堆積物から木片2点を採取した。全試料の前処理は完了したが、加速器質量分析装置が調整中のため年代測定は未実施である。これまでの成果から、大谷崩の発生は14～15世紀に遡り、16世紀までに複数回の土砂流出があった可能性が高まっている。遠山川ではAD715とは異なる13・14世紀の崩壊イベントが示唆されており、本研究による新たな年代値の取得が期待される。			
4. 成果論文リスト(著者名、タイトル、雑誌名、巻号、ページまたはDoi、年、順番は入れ替え可) (準備中)			
5. 学会発表リスト(著者名、タイトル、学会名、開催場所、年月日)			
荻谷愛彦・中西利典・木村恵樹・山田隆二・木村 誇・村松 武・青島 晃・北川浩之(2024): 堰き止め湖沼堆積物の^{14}C年代から探る大谷崩の発達過程. 日本第四紀学会2024年研究大会、東北大学(仙台市)、2024年8月31日.			
6. その他の成果リスト(著書、特許等)			
日本地すべり学会研究助成(2023～2025年度)「埋もれ木の年代測定に基づく歴史的な大規模土砂災害の再検証: 池口崩れの事例」を活用した現地討論会の開催〔2024年11月: 案内者として荻谷・山田・中西が参加し、試料採取も実施〕。			

(別紙様式09-1) 2024年度名古屋大学宇宙地球環境研究所「加速器質量分析装置等利用(共同利用)」報告書			
報告年月日	2025年3月13日		
代表者氏名	たかはしひろし 高橋浩		
所属機関	産業技術総合研究所		
部局	活断層・火山研究部門		
職名	主任研究員		
E-mailアドレス	h.a.takahashi@aist.go.jp		
下記の共同研究について、別紙のとおり報告します。			
記			
1. 研究課題名			
和文	水試料の放射性炭素濃度測定における生物活動の影響除去に関する新手法開発		
英文	Development of a new inhibition method for influence of microbial activities on the radiocarbon measurement in water sample		
2. 研究体制(宇宙地球環境研究所の受入責任教員を含めてください)			
氏名	所属機関、部局	職名	役割
高橋浩	産業技術総合研究所	主任研究員	全体統括・手法評価
南雅代	名古屋大学	教授	ろ過併用手法評価
垣内田滉	名古屋大学	大学院生	塩類影響評価
3. 研究成果の概要(400字程度でまとめてください)			
塩化ベンザルコニウム(BAC)の添加では、海水や汽水試料では生物活動の影響を排除できないことがわかっているが、昨年度までの研究で、塩類によるBACの殺菌効果の阻害を原因として指摘した。今年度は、生物活動の阻害に対する塩類の種類や濃度、塩類添加からの経過時間といった条件を検証するために、あらかじめ塩類を添加したBAC溶液を用いた実験を行ったが、塩類による阻害効果が認められなかった。水試料に対するBAC溶液の濃度を規定以上に保つためには、あらかじめ準備するBAC溶液の濃度を高くする必要があることから、塩類による阻害が溶液全体のBACに及ばなかったためと思われる。また、低い塩濃度で実験する必要があることから、地下水試料を用いたが、含まれる微生物種や量が海水等と比較してBACによる殺菌効果が出やすかったという可能性も考えられた。 一方、BACが汚泥によって分解されることが知られていることから、その検証のために、海水試料を採取した地点の海底泥を添加して、BACの効果を検証した。海底泥を滅菌の有無や泥の添加の有無を比較した。実験では泥の添加そのものの影響を分離することが難しく、泥の添加によるBACの生物活動の阻害効果に及ぼす影響の有無について判断できていない。			
4. 成果論文リスト(著者名、タイトル、雑誌名、巻号、ページまたはDoi、年、順番は入れ替え可)			
なし			
5. 学会発表リスト(著者名、タイトル、学会名、開催場所、年月日)			
垣内田滉・南雅代・高橋浩「海水の炭素同位体分析における塩化ベンザルコニウム(BAC)の殺菌効果:塩濃度とBAC濃度による違い」日本地球化学会、金沢大学、2024年9月18日			
Takahashi, H. A., Kakiuchida, K., Minami, M. "Why does the bactericidal effect of benzalkonium chloride diminish in ¹⁴ C analysis of seawater?", 4th International Conference on Radiocarbon in the Environment Conference, Castle of Charles V, Lecce, Italy, Sep. 24, 2024			
垣内田滉・南雅代・高橋浩「海水試料の塩化ベンザルコニウム(BAC)による殺菌効果:泥への吸着の影響」質量分析学会同位体比部会、ホテルサンバリー、2024年11月19日			
垣内田滉・南雅代・高橋浩「海水試料の塩化ベンザルコニウム(BAC)による殺菌」2024年度地球化学若手会「春の研究会」、信州大学、2025年3月3日			
6. その他の成果リスト(著書、特許等)			
なし			

(別紙様式09-1) 2024年度名古屋大学宇宙地球環境研究所「加速器質量分析装置等利用(共同利用)」報告書			
報告年月日	2025年3月31日		
代表者氏名	池盛 文数		
所属機関	名古屋市環境科学調査センター		
部局	環境科学室		
職名	研究員		
E-mailアドレス	fumikazu.ikemori@gmail.com		
下記の共同研究について、別紙のとおり報告します。			
記			
1. 研究課題名			
和文	放射性炭素を用いた大気エアロゾルの発生起源解析		
英文	Source analysis of atmospheric aerosols using radiocarbon		
2. 研究体制(宇宙地球環境研究所の受入責任教員を含めてください)			
氏名	所属機関、部局	職名	役割
池盛 文数	名古屋市環境科学調査センター	日本	研究員
南 雅代	名古屋大学宇宙地球環境研究所	日本	教授
中田実希	名古屋大学大学院環境学研究科	日本	博士前期課程2年
夏目 花	名古屋大学理学部	日本	学部4年
3. 研究成果の概要(400字程度でまとめてください)			
2018年に捕集した名古屋の総大気粉じんについて、硫黄(S)及び金属元素分析を行い、前年に分析した2019年と2020年のデータと合わせて解析を行った。2018年の名古屋市TSP中のS濃度は、1月から3月末にかけて上昇傾向が見られ、7月に高濃度となり、6～8月(夏期)の濃度の平均値は$1.22 \mu\text{g}/\text{m}^3$($n=18$)であった。2019年、2020年夏期のS濃度の平均値は$1.50 \mu\text{g}/\text{m}^3$($n=18$)、$1.10 \mu\text{g}/\text{m}^3$($n=18$)であり、3年間では2020年が最低濃度であった。また、2018年、2019年夏期はS濃度とV濃度の相関が高い($R=0.93$、$R=0.76$)が、2020年夏期はそれらと比べて低く($R=0.37$)、Ni濃度についてもV濃度と同様の相関関係が見られた。これらは2020年1月に施行された、船舶の排ガス規制の影響によるものと考えられた。本研究は、本研究所年代測定研究部の学生(夏目花氏)の卒業研究として実施された。			
4. 成果論文リスト(著者名、タイトル、雑誌名、巻号、ページまたはDoi、年、順番は入れ替え可)			
5. 学会発表リスト(著者名、タイトル、学会名、開催場所、年月日)			
夏目 花、南 雅代、池盛文数、片岡賢太郎、浅原良浩、船舶重油規制とCOVID-19が2020年の名古屋市の大気エアロゾル中の硫黄および微量金属濃度に与えた影響、日本地球化学会 第71回年会、金沢大学、2024年9月 夏目 花、南 雅代、池盛文数、片岡賢太郎、浅原良浩、船舶重油規制が名古屋の大気エアロゾル中の硫黄および微量元素濃度に及ぼす影響、2024年度地球化学若手会「春の研究会」、信州大学、2025年3月			
6. その他の成果リスト(著書、特許等)			

(別紙様式09-1) 2024年度名古屋大学宇宙地球環境研究所「加速器質量分析装置等利用(共同利用)」報告書			
報告年月日	2025年3月30日		
代表者氏名	たにみずまさはる 谷水雅治		
所属機関	関西学院大学		
部局	生命環境学部		
職名	教授		
E-mailアドレス	tanimizum@kwansei.ac.jp		
下記の共同研究について、別紙のとおり報告します。			
記			
1. 研究課題名			
和文	海藻資料を用いた北海道周辺海域14C量の分布と変遷の把握		
英文	Spatial and temporal variation of seawater 14C around Hokkaido area reconstructed from seaweed samples		
2. 研究体制(宇宙地球環境研究所の受入責任教員を含めてください)			
氏名	所属機関、部局	職名	役割
谷水雅治	関西学院大学生命環境学部	日本国	教授
野津亜莉紗	関西学院大学理工学研究科	日本国	M2大学院生
石橋歩果	関西学院大学生命環境学部	日本国	学部4年生
南雅代	名古屋大学	日本国	教授
3. 研究成果の概要(400字程度でまとめてください)			
14Cは、1950年代から1960年代にかけて行われた大気核実験により、人為的に太平洋の中心部から全球へと大量に拡散された。本研究では、これらの人為的な核種の海洋への混入が海藻に記録されているかを評価するため、コンブにおける14C量の変動について、博物館資料から3点採取し調査した。厚岸産コンブの14C量は、大気核実験が盛んであった1955年よりも1966年の試料で高く、対して1994年では減少した。ピーク時期が大気核実験時期より遅れているのは、大気と海洋表層が平衡に近づくまでに時間がかかるためであり、その後の減少は深層水などの14C量の少ない海水との混合や放射壊変の結果であると考えられる。この傾向は先行研究と同様であるため、コンブは海水の14C量の情報を保存しており、海洋トレーサーとして利用できる可能性が示唆された。			
4. 成果論文リスト(著者名、タイトル、雑誌名、巻号、ページまたはDoi、年、順番は入れ替え可)			
5. 学会発表リスト(著者名、タイトル、学会名、開催場所、年月日)			
6. その他の成果リスト(著書、特許等)			

（別紙様式09-1） 2025年度名古屋大学宇宙地球環境研究所「加速器質量分析装置等利用（共同利用）」 報告書			
報告年月日			
代表者氏名	きたがわじゅんこ 北川 淳子		
所属機関	福井県年縞博物館		
部局			
職名	学芸員		
E-mailアドレス	junkokit3810@gmail.com		
下記の共同研究について、別紙のとおり報告します。			
記			
1. 研究課題名			
和文	福井県三方五湖周辺遺跡の編年		
英文	Determining the chronology of archaeological sites of Five Lakes of Mikata area, Japan		
2. 研究体制（宇宙地球環境研究所の受入責任教員を含めてください）			
氏名	所属機関、部局	職名	具体的な役割
北川 淳子	福井県年縞博物館	学芸員	総括、データ整理、前処理
小島 秀彰	若狭三方縄文博物館	学芸員	測定試料選定、データ整理
清水 孝之	福井県教育庁埋蔵文化財センター	次長	測定試料選定
松本 泰典	福井県教育庁埋蔵文化財センター	主任	測定試料選定
鯉本 眞友美	福井県立若狭歴史博物館	学芸員	測定試料選定
北川 浩之	名古屋大学宇宙地球環境研究所	教授	指導、年代測定
3. 研究成果の概要（400字程度でまとめてください）			
三方五湖周辺の重要拠点となる縄文時代の遺跡の遺物を中心に、土器の付着物38点、木製品48点、縄と種子各1点の合計88点の測定を行った。すでに測定されている遺物の年代と併せて若狭湾沿岸の縄文時代の重要拠点の年代を議論できるだろう。また、中部日本海側の土器型式の年代について明らかになり、年代測定結果のない多くの遺跡の年代がこの地方での年代に基づいて決定されることが期待できる。さらに、当地域の文化変遷の時系列を確定するため、これまで型式学と層位学のみで年代が決定されていた弥生時代以降についても測定を行った。 これらの結果から、堆積物や、他の地域の遺跡との共通の年代決定の手法で当該地域の年代が決定でき、他地域との文化変遷や、湖沼堆積物の分析結果と比較検討できるようになることが期待できる。今後、三方五湖の花粉分析などの結果と、遺跡での人間活動について比較検討する予定である。			
4. 成果論文リスト（著者名、タイトル、雑誌名、巻号、ページまたはDoi、年、順番は入れ替え可）			
5. 学会発表リスト（著者名、タイトル、学会名、開催場所、年月日）			
6. その他の成果リスト（著書、特許等）			

(別紙様式09-1) 2024年度名古屋大学宇宙地球環境研究所「加速器質量分析装置等利用(共同利用)」報告書			
報告年月日	2025年3月31日		
代表者氏名	うえむら りゅう 植村立		
所属機関	名古屋大学		
部局	環境学研究科		
職名	准教授		
E-mailアドレス	ryu.uemura@nagoya-u.jp		
下記の共同研究について、別紙のとおり報告します。			
記			
1. 研究課題名			
和文	鍾乳石の放射性炭素年代測定前処理の検討		
英文			
2. 研究体制(宇宙地球環境研究所の受入責任教員を含めてください)			
氏名	所属機関、部局	職名	役割
植村立	名古屋大学、環境学研究科	准教授	実験
南雅代	宇宙地球環境研究所	教授	実験指導
3. 研究成果の概要(400字程度でまとめてください)			
文献調査により最新の試料採取方法などについて議論は行った。しかし、検討に時間を要したため実試料を用いた実験は来年度に延期した。			
4. 成果論文リスト(著者名、タイトル、雑誌名、巻号、ページまたはDoi、年、順番は入れ替え可)			
特になし			
5. 学会発表リスト(著者名、タイトル、学会名、開催場所、年月日)			
特になし			
6. その他の成果リスト(著書、特許等)			
特になし			

(別紙様式09-1) 2024年度名古屋大学宇宙地球環境研究所「加速器質量分析装置等利用(共同利用)」報告書			
報告年月日	2025年3月31日		
代表者氏名	おくの みつる 奥野 充		
所属機関	大阪公立大学		
部局	大学院理学研究科		
職名	教授		
E-mailアドレス	okuno326@omu.ac.jp		
下記の共同研究について、別紙のとおり報告します。			
記			
1. 研究課題名			
和文	湿地堆積物の堆積過程の高精度復元		
英文	Accurate reconstruction of deposition process of wetland sediments		
2. 研究体制(宇宙地球環境研究所の受入責任教員を含めてください)			
氏名	所属機関、部局	職名	役割
奥野 充	大阪公立大学大学院理学研究科	教授	立案および総括
南 雅代	名古屋大学宇宙地球環境研究所	教授	受入責任教員
藤木利之	岡山理科大学理学部	准教授	現地調査, 花粉分析
大下愛央	大阪公立大学大学院理学研究科	修士2年	現地調査, 試料調製
西川 空	大阪公立大学大学院理学研究科	修士2年	現地調査, 試料調製
3. 研究成果の概要(400字程度でまとめてください)			
湿地堆積物の記録特性(連続堆積の有無)を評価するには、複数地点でコア試料を採取し、空間的な広がりを把握する必要がある。この研究では、秋田県湯沢市のコケ沼湿原5点、新潟県佐渡市の杉池5点、石川県白山市の南竜ヶ馬場1点、福井県勝山市の池ヶ原湿原2点、山口県阿武町の宇生賀盆地3点、佐賀市の桧原湿原3点、計19点の14C年代を得た。これらは、それぞれ口頭発表しており、コケ沼湿原と杉池については「年代測定研究」に投稿中である。または、池ヶ原湿原と宇生賀盆地については、それぞれ西川と大下の修士論文としてまとめられており、順次、学術論文として公表していく予定である。また、桧原湿原も現在、投稿準備を進めているが、南竜ヶ馬場については得られた1点がModernであり、さらなる年代測定が必要である。これらの湿原の調査から、湿原拡大の要因として、地すべりや堤の構築などが考えられた。			
4. 成果論文リスト(著者名、タイトル、雑誌名、巻号、ページまたはDoi、年、順番は入れ替え可)			
林 蓮太郎・藤木利之・奥野 充・中西利典・林田 明・南 雅代・ホン ワン(2025) 佐渡島赤玉地区の杉池周辺のコア試料の層序と年代。名古屋大学年代測定研究, 印刷中。 黒木 瞭・林 優樹・平田竣也・奥野 充・藤木利之・中西利典・林田 明・南 雅代・ホン ワン(2025) 秋田県湯沢市、コケ沼湿原のコア層序と年代。名古屋大学年代測定研究, 印刷中。			
5. 学会発表リスト(著者名、タイトル、学会名、開催場所、年月日)			
西川 空, 大下愛央, 黒木 瞭, 奥野 充, 藤木利之, 中西利典, 林田 明, 鳥井真之, 洪 完, 鹿島 薫, 南 雅代, 複数地点のコア層序による湿原の堆積環境史: 八丁平湿原と池ヶ原湿原を例として。国際火山噴火史情報研究集会 2024-2(福岡大, ハイブリット), 2025/2。 大下愛央, 西川 空, 黒木 瞭, 奥野 充, 藤木利之, 中西利典, 林田 明, 鳥井真之, 洪 完, 鹿島 薫, 南 雅代, 複数地点ボーリング調査による湿原形成史: 蛇石大池湿原と宇生賀盆地を例として。国際火山噴火史情報研究集会 2024-2(福岡大, ハイブリット), 2025/2。 黒木 瞭, 林 優樹, 平田竣也, 奥野 充, 藤木利之, 中西利典, 林田 明, 南 雅代, 秋田県湯沢市, コケ沼湿原のコア試料層序。国際火山噴火史情報研究集会 2024-2(福岡大, ハイブリット), 2025/2/9。 林 蓮太郎, 奥野 充, 中西利典, 林田 明, 南 雅代, 佐渡島赤玉における地すべりの地形区分と堆積物層序 鹿島 薫, Liang Chi Wang, 奥野 充, 大下愛央, 西川 空, 林田 明, 中西利典, Ericson Bariso, Robjunelieaaa Lim, Danikko John Rivera, Marie Thess Quilalang, Raymond Patrick Maximo, Valerie Shayne Olfindo, Jason Edward Cochon, Arian Paul D. Norcio, Aljhon Q. Marco, Cheska Joi G. Vergara, パイタン湖 50 mコアから得られた珪藻遺骸群集(予報)。国際火山噴火史情報研究集会 2024-2(福岡大, ハイブリット), 2025/2/9。 平田竣也, 黒木 瞭, 奥野 充, 藤木利之, 中西利典, 林田 明, 南 雅代, 白山火山, 南竜ヶ馬場湿原のコア試料層序。国際火山噴火史情報研究集会 2024-2(福岡大, ハイブリット), 2025/2/9。 黒木 瞭, 林 優樹, 平田竣也, 奥野 充, 藤木利之, 中西利典, 林田 明, 南 雅代, 秋田県湯沢市, コケ沼湿原のコア試料層序と年代。第36回(2024年度)名古屋大学宇宙地球環境研究所年代測定研究シンポジウム(名古屋大, ハイブリット), 2024/2/28。			
6. その他の成果リスト(著書、特許等)			
なし			

(別紙様式09-1) 2024年度名古屋大学宇宙地球環境研究所「加速器質量分析装置等利用(共同利用)」報告書			
報告年月日	2025年3月31日		
代表者氏名	おくの みつる 奥野 充		
所属機関	大阪公立大学		
部局	大学院理学研究科		
職名	教授		
E-mailアドレス	okuno326@omu.ac.jp		
下記の共同研究について、別紙のとおり報告します。			
記			
1. 研究課題名			
和文	火山噴火史を高精度化する年代学的研究		
英文	Chronological research to improve the accuracy of volcanic eruption history		
2. 研究体制(宇宙地球環境研究所の受入責任教員を含めてください)			
氏名	所属機関、部局	職名	役割
奥野 充	大阪公立大学大学院理学研究科	教授	立案および総括
南 雅代	名古屋大学宇宙地球環境研究所	教授	受入責任教員
黒木 瞭	大阪公立大学大学院理学研究科	修士2年	現地調査, 試料調製
平田竣也	大阪公立大学大学院理学研究科	修士1年	現地調査, 試料調製
林 優樹	大阪公立大学大学院理学研究科	修士1年	現地調査, 試料調製
3. 研究成果の概要(400字程度でまとめてください)			
十和田八戸テフラ(To-H)の埋没樹幹(1-A, 1-B, 1-Cの3つに分かれる)を採取して、その年輪を計測した。1-C試料の256枚目年輪から13,156 ± 56 BPの14C年代を得た。この値はvan der Plicht et al. (2012)が報告した14C年代とよく一致したが、木村未公表データ(年輪幅)とのクロスデーティングは$t = 4.37$で、十分な有意性が得られなかった。今後、$\delta 18O$によるクロスデーティングを行って、さらなる照合を進める予定である。それらに基づいてこの樹幹が記録している14C濃度変動を明らかにする。暦年較正曲線IntCal2020では、樹木年輪以外で構成されているこの年代域でそれらを補完する役割を果たすことを考えている。			
4. 成果論文リスト(著者名、タイトル、雑誌名、巻号、ページまたはDoi、年、順番は入れ替え可)			
林 優樹・木村勝彦・南 雅代・ホン ワン・奥野 充(2025)十和田八戸テフラの埋没樹幹の年輪計測。名古屋大学年代測定研究, 投稿中。			
5. 学会発表リスト(著者名、タイトル、学会名、開催場所、年月日)			
林 優樹, 奥野 充, 木村勝彦, 南 雅代, 十和田八戸火砕流の埋没樹幹の年輪計測。国際火山噴火史情報研究集会 2024-2(福岡大, ハイブリット), 2025/2。 林 優樹, 奥野 充, 木村勝彦, 南 雅代, 十和田八戸火砕流の埋没樹幹の年輪計測結果と今後の研究計画。第36回(2024年度)名古屋大学宇宙地球環境研究所年代測定研究シンポジウム(名古屋大, ハイブリット), 2024/2/28。			
6. その他の成果リスト(著書、特許等)			
なし			

(別紙様式09-1) 2025年度名古屋大学宇宙地球環境研究所「加速器質量分析装置等利用(共同利用)」報告書			
報告年月日	2025年3月31日		
代表者氏名	ささきさとし 佐々木聡史		
所属機関	群馬大学 共同教育学部		
部局	群馬大学 共同教育学部		
職名	講師		
E-mailアドレス	satoshi-ssk@gunma-u.ac.jp		
下記の共同研究について、別紙のとおり報告します。			
記			
1. 研究課題名			
和文	南極域における第四紀の海成化石と堆積物を用いた古環境復元		
英文	Quaternary paleoenvironment reconstruction using marine fossils and sediments in the Antarctic region.		
2. 研究体制(宇宙地球環境研究所の受入責任教員を含めてください)			
氏名	所属機関、部局	職名	具体的な役割
佐々木聡史	群馬大学 共同教育学部理 科教育講座	講師	年代測定試料作成
北川 浩之	名古屋大学ISEE 年代測定 研究部	教授	年代測定
南 雅代	名古屋大学ISEE年代測定 研究部	教授	年代測定
3. 研究成果の概要(400字程度でまとめてください)			
名古屋大学ISSE年代測定研究部において放射性炭素(^{14}C)を測定の試料作から分析までを行った。各層準から貝形虫化石とゴカイ化石を抽出し、合計4試料の年代測定試料を作成したが、まだ測定はできていない。 同層準で産出した貝形虫化石とゴカイ化石の放射性炭素量を求め、南極における年代と古環境を復元する予定である。			
4. 成果論文リスト(著者名、タイトル、雑誌名、巻号、ページまたはDoi、年、順番は入れ替え可)			
該当なし			
5. 学会発表リスト(著者名、タイトル、学会名、開催場所、年月日)			
該当なし			
6. その他の成果リスト(著書、特許等)			
該当なし			

(別紙様式09-1) 2024年度名古屋大学宇宙地球環境研究所「加速器質量分析装置等利用(共同利用)」報告書			
報告年月日	2025年3月30日		
代表者氏名	中西利典		
所属機関	ふじのくに地球環境史ミュージアム		
部局	学芸課		
職名	教授		
E-mailアドレス	mid24t@gmail.com		
下記の共同研究について、別紙のとおり報告します。			
記			
1. 研究課題名			
和文	沖積層に含まれる碎屑物を用いた堆積年代の高精度解析		
英文	High resolution analysis of the depositional ages from coastal sediments after the Last Glacial Maximum		
2. 研究体制(宇宙地球環境研究所の受入責任教員を含めてください)			
氏名	所属機関、部局	職名	役割
中西利典	ふじのくに地球環境史ミュージアム、学芸課	教授	試料選定と処理
北川浩之	名古屋大学、ISEE	教授	年代測定
3. 研究成果の概要(400字程度でまとめてください)			
今年度は堆積年代の高精度解析に適した試料が得られなかったため、新たな検討を実施しなかった。前年度に依頼した阿蘇カルデラの測定結果が届き次第、カルデラ形成以後の湖成堆積物から河川成堆積物へと移り変わる古環境変化に関する微化石群集組成やCNS分析結果と合わせて、植物片の再堆積について検討したい。この研究成果については、国際学会で発表して、SCI誌で公表する予定である。一方、本研究課題に関連する釧路市春採湖および丹那盆地、紀伊半島ゆかし潟の成果が学術誌に公表され、富士川扇状地および斐伊川河口の成果を学会発表した。			
4. 成果論文リスト(著者名、タイトル、雑誌名、巻号、ページまたはDoi、年、順番は入れ替え可)			
酒井恵祐・中西利典・七山 太・藤木利之・大串健一. 北海道東部春採湖の花粉分析による過去9,500年前から3,200年前にかけての古植生変遷. LAGUNA, 31, p.1-13, 2024年 木村治夫・堤 浩之・稻荷絢音・谷口 薫・中西利典. 地中レーダ探査からみた丹那断層田代地点の極浅部左横ずれ構造. 第四紀研究, 63(2), p.65-75, 2024年, doi: 10.4116/jaqua.62.220756 Toshiyuki Fujiki, Toshimichi Nakanishi, Kazuyoshi Yamada, Kaoru Tabata, Haruhiro Ikeda, Pollen analysis of sediment core from Yukashigata Lagoon, western Japan: revealing human induced paleovegetation changes during the past 1500 years. Terrestrial, Atmospheric and Oceanic Sciences, 36, 4, 2025, https://doi.org/10.1007/s44195-025-00088-8			
5. 学会発表リスト(著者名、タイトル、学会名、開催場所、年月日)			
Toshimichi Nakanishi, Tatsuya Ishiyama, Ki-suck Sung, Wan Hong, Holocene sediments reveal accumulation rates across an onshore subduction thrust in northeastern Nankai Trough. The 4th International Radiocarbon in the Environment Conference, Lecce, September 2024 Toshimichi Nakanishi, Koji Seto, Kota Katsuki, Toshiaki Irizuki, Yoshiki Saito, Wan Hong, Holocene sediments reveal accumulation rates across an onshore subduction thrust in northeastern Nankai Trough. The 4th International Radiocarbon in the Environment Conference, Lecce, September 2024			
6. その他の成果リスト(著書、特許等)			
中西利典・石山達也・ソン キソク・ホン ワン, 群列ボーリング調査による森本断層の活動履歴の検討. 国際火山噴火史情報研究集会講演要旨集, 2024 (2), p.120-122, 2025年			